

佳作

対峙

高城 しもん

■二〇一六年——。那覇市内のホテル。

左腕を伸ばすと、ワイシャツの内側に隠れていた腕時計が姿を現した。十八時まで三十分ある。いや、もう三十分しかない。そう思いながら、勝利（シヨリ）は思わずツバを呑み込んだ。身だしなみに不備な点はないか、鏡を前にしてもう一度見直す。

糊の効いたワイシャツの襟元から垂れ下がるグレイのネクタイをあらためて結び直す。白いV字がすつきりと見えるように制服の襟元を両手で摘まんで下へ叩く。銀色に輝く三つのボタンを留め、生地全体に皺がひとつもないことを確認すると、黄色のそで章に小さな糸が付着しているのを発見、手早く払いのける。そして直立不動のポーズを取り、胸を張れば、左ポケットには沖縄県警察をしめす黄金色のバッジ。袖の長さもちょうどいい。左右に少しだけ顔を振りながら、制帽がまつすぐになるようツバをつまんで整え、ネクタイのディンプルをまつすぐにする。水平に二本線がデザインされている制帽を被っているのは、勝利が隊長にまで上りつめてきた証しだ。ポケットの中身や制服の軽さに微かながら違和感があるのは、長年所持してきた警察手帳や警笛、拳銃を署に置いてきたからだ。

一歩下がり、自身の全体像を眺めてみる。制服は文句のつけようがない。この日のために新品同様にクリーニンングされ、一点のチリもホコリももう付着していない。ボタンやバッジは輝き、制帽も型くずれがなく、沖縄県警察官であることの存在感を際立たせている。あまりの完璧さに、今夜初めて自分を見る者が、隊長とは名ばかりの単なるヨボヨボの年寄りに見えるのではないかと不安がよぎる。勝利は高校卒業後、警察官Bの採用試験に合格し、一九七五年に拝命して以来、四十一年間にわたっていくつかの役職を勤め上げてきた。しかし自分ではその実績らしきものが分からない。分かるのは、鏡に映し出されているのが今や初老の男という現実だ。制服と身体のギャップを目の当たりにし、諦めるように笑みを浮かべ、頬を緩めるのだった。

肩の筋肉は落ち、胸板も薄くなっているのが自分にははっきりと実感

できる。高校時代はサッカー部で主将を務め、地域警察として交番勤務を始めた頃からは空手のトレーニングで鍛えあげたにも関わらず、ふくらはぎの張りはなくなり、コンクリートのように堅かった胸筋は重力に逆らえず垂れ始めている。もしかしたら、と勝利は希望的に考える。筋肉の衰えは自分だけにしか分からないのかもしれないと。他人が見れば、相変わらず胸板が厚く、上腕筋が発達し、なによりも将棋の駒のように角張った顔面にふたつある眼球が鋭く対象物を見つめる太々しい様は、現役時代のままであると、人は好意的に解釈してくれるかもしれない。太い眉と鼻の下にたくわえた髭はもちろん、睫毛までも黄ばみがかかった白髪になってしまったが、確かに目線だけは鋭い。目の下のクマの輪郭が大きな瞳をさらに浮き彫りにし、若い頃よりもきつい眼差しになっている気がする。眼力の鋭さは、自分でも嫌だった。ココア（心愛）が生

まれてしばらくは、抱き上げながら思いっきり微笑んでいるつもりでも、怖がられ泣かれたものだ。私服姿で個人経営の商店に入り、さんぴん茶を一本買おうとしただけで、店主が後ずさりするくらいだった。だからいつも口角を上げるように気を使ってきた。初めて入る居酒屋の暖簾をくぐるとき、銀行の窓口で手続きをお願いするとき、そして優秀な部下を褒めるときも、できるだけ頬をゆるめ、口角を上げ、柔らかい表情でその場を凌ぐことを意識してきた。そうしないと相手が怯む。今夜の「定年退職記念パーティ」も柔らかかな笑顔を意識しなければならぬ。

洗面所の重いドアがそつと開き、後輩が顔を半分だけ見せた――。「時間ですよ。みんなお待ちかねです」

■一九九六年——。ゲート前。

「拳銃は置いていきなさい」

上部の窓から差し込む朝の光が我那覇所長の濃紺の制服を柔らかい色に染めていた。勤務前のいつもの朝礼だった。朝礼といっても、同僚の比嘉は夜勤明けでもう帰宅した。人魚村交番にいるのは、ふたりだけだ。ガラス戸の向こう側ではランドセルを背負った子供たちが歩いている。顔なじみのスーパールの店長、島袋もこちらに向かって軽く会釈しながら横切っていく。

「機動隊からヘルプ要員の要請があつてな。うちの交番からは金城君、君を派遣することにしたんだ」

「はあ」

勝利ははじめ、何を言われているのか分からなかった。いつもの交番勤務とは違う、ヘルプ要員？

「人々が集まりだしているんだ。基地内に新しい滑走路をつくろうという計画が浮上してからというもの、村人の中で抵抗運動が起きている。昨日だけで二十人ばかりが集まって、声を上げていたらしい」

そこまで聞いて、勝利は理解できた。基地のフェンス前で小規模な抗議活動がはじまっていることは知っていた。交番へ勤務に出かける途中、フェンス前の道を通ることになる。そこでは我那覇が説明したように、ゲート内に入ったりする工事用トラックや軍の車輛の出入りが増え始めていた。トラックには砂利や埋め立て用資材などが積まれていた。その車輛の進入を阻止するために腕を組んでバリケードを張る村人たちの姿を何度か見たことがある。

「つまり、市民による抗議活動を鎮めることが私の任務ですか？ 集まっている人々を説得して家に帰らせたり、工事車輛に対して石を投げつけようとしている人がいたらそれを食い止めたり」

「違う。それは違う」我那覇は、大きく首を振った。「彼らは石を投げない。ただ、そこにおいて声を張り上げているだけだ。あるいは、腕を組み、座り込みもする。ときには車輛の侵入を防ぐために、身の危険を承知で車輛の前に立ちはだかる。でも、石を投げつけるわけではない。彼らがやっていることは、あくまでも非暴力による抵抗だ」

非暴力による抵抗——。勝利はその言葉をアタマの中で繰り返した。

「今日の任務は、機動隊のサポート要員だからな。村人が今日一日、事故なく過ごせるようにするのが金城君、君の使命だ」標準語が様になっている。以前のようには、ウチナーグチで話しかけることもなくなっていた。

我那覇は被っていた制帽をとると、髪の毛を後ろへかき分けた。そしてスチールの机に瘦せたお尻を乗せ、足を組んだ。立ったままでも、椅子に腰掛けたままでもなく、こうして話すことで、勝利が緊張しないで話を聞けるだろうと判断したからだ。

「一九七二年は覚えているか？」

「はい。沖繩が日本に返還された年。まだやんちゃな十代でしたけど、はっきりと覚えています」

「あの数日前、俺は機動隊のヘルプ要員として那覇の街に立つことになったんだ。五月一五日を境にして、沖繩の通貨はそれまでのドル紙幣から円になる。それに伴い、日本本土から大量のお札が沖繩に入ってくるようになった。五四〇億円もの現ナマだ。初めは俺も『円』って何だ？と思ったものだ。聖徳太子って何者だ？ とかな。未だによく分からない

いが」咳払いをしながら、我那覇は自らを笑った。

「大量の札束を積んだ自衛艦が那覇軍港に到着し、何台もの現金輸送車が那覇の市街地を通り抜ける。これに目を付けて現金輸送車を襲撃されたら一大事だろう。各部署から多くのサポート要員が集められ、当時まだ新人だった俺もその一員になった。そりゃあ緊張したさ。史上最大の現金輸送作戦とか言われたからな。映画を撮影しているみたいない日だった」

我那覇は半ば懐かしむようにもう一度小さく笑った。「俺が派遣されたのは、松山の日銀沖縄支店前だった。拳銃を所持しろと指示が出てな。腰に装着して現地へ出かけた。現地ではカービン銃を持たされた警察官も多数いた。あたりは警察官だらけ。アーキサミヨー（何事だ！）。組織的な大泥棒が沖縄にやってくるのかと思ったさ。ボニーとクライドか、

怪盗ルパンか、それとも江戸からネズミ小僧が到来か」

今度は勝利が笑った。我那覇は組んでいた足を左右入れ替えた。

「五四〇億円が何台もの現金輸送車に積まれて、朝いちばんで、日銀沖縄支店めざしてやってきて、俺たちの隊列の前をゆっくりと通過していく。そりゃ、緊張したさ。新聞記者も、テレビ局の取材班も来ていた。俺たち機動隊は何百メートルにもわたる隊列をつくり、あらゆる襲撃に備えていた。あんなに人数集めるの、さぞかし大変だっただろう。沖縄各地から、離島からもヘルプ要員としてかり出されて来ているわけだからな。むしろ、手薄になった各地域で犯罪でも起きなければ、と思ったものさ。隊長の笛が鳴って、現金輸送車が近づいてきたことを伝えた。門が開いて、カービン銃をもっている者は胸のあたりに持ち上げて、いつ起こるか分からない襲撃にも対応できるような構えになっていた。朝の澄み切っ

た空気を裂くように、エンジン音が聞こえてきた。そして深い紺色をした四角いクルマたちが目の前を通過していく。この中に大金が積まれているのだ。札束をイメージしようとしたけど、うまくイメージできない。だってそうだろ、そんな大金見たことがない。思わず、目の前を通過していく現ナマにツバを呑み込んださ」

「私なら、咽せて咳き込んでいたかもしれない」
「だからよ」

我那覇はもう一度足を組み替えた。「現金輸送車は次々に門の中へと吸い込まれていった。門の中にも、たくさん機の機動隊がいたが、俺たちの仕事はそこまでだった。解散となり、行列を組んだまま、道を歩いたさ。緊張感が解けて、いつもの朝に戻った。子供たちが学校へ向かって歩き、大人たちがそれぞれの職場に向かう、いつもの朝の風景にだ。そんな中、

テレビ局のインタビュアーにひとりのサラリーマンが答えていた。俺は聞き逃さなかった。『なーにをあんな大げさな警備しよって、沖縄の警察はそんなに暇とカネが有り余っているのか?』。あいつぶやき、今でも耳に残っている。確かにそうだった。警察は肩すかしを食らった気分だった。俺はそのとき思ったさ。この沖縄は平和の島でありたいとみんな共通の思いを持ちながら暮らしているんだってね。だからよ、金城君。今日は拳銃を置いていきなさい」

集落を通り過ぎると軍のゲート前に出た。高く聳え立つ緑色のフェンスの向こう側では、二台のヘリコプターがだらしなく翼を休めている。プロペラの影が海に向かって長く伸びる。ゆったりとうねる青い水平線。岸沿いにところどころ緑色の一帯が輝いて見えるのはサンゴが海底を埋

め尽くしているためだ。二千メートルと噂されている滑走路が一本、水平線と平行している。アパートから交番へ出勤する途中、道を曲がる寸前まで目の前に広がる日常の風景だ。しかし、制服を着て、任務としてその現場へ向かうといつもととは違う緊張感がはしった。

人々の声が聞こえてきた。黄色い昇り旗も見える。「新滑走路建設反対！」朱書きされた文字が海から吹き上げる潮風に揺れている。もう一本見つけた。「ジュゴンの海を埋め立てるな！」掲げているのは日焼け対策だろう、アタマからタオルを巻き付けている三十代半ばの女性だ。確かに人数が増えていた。三十人はいるだろうか。機動隊の数は、六名だ。自分が隊列に参加しても七名。勝利は七対三十という図式をイメージした。

昇り旗を掲げているふたりを除いたすべての人数がゲート前にいた。

ほとんどが麦わら帽子を被り、長袖の上着を着て強い日射しを遮るスタイルだ。サングラスをしている男もいるため、表情が読み取れない。彼らは一列に並び、同様に一列に整列している機動隊六名と向き合っている。ゲート前に立つふたりのアメリカ人兵士はまっすぐ前を向いたままピクリとも動かない。

村人たちと機動隊、ふたつの列の横を通り抜けてゲート内に停車している装甲車前に立つ男のところまで勝利は歩いて行く。村人たちの顔が勝利の歩く速度に合わせて角度を変えていく。「あれっ？」と、そのうちの一人が声を上げた。「おまわりさん！」

振り向くと、村でたったひとつだけ存在するスーパーの店長、島袋だった。「何で、交番のおまわりさんが？」

勝利はその問いには答えず、「おはようございます」と軽く挨拶だけし

て装甲車の前に向かった。

「ヘルプ要員で参りました、金城勝利です」

ゲート前の装甲車前に立っていた男に向かって勝利は挨拶をした。

六名の機動隊のトップとして内地から任命された鈴木は、なめ回すように勝利を見た。能面のような輪郭に細い目がふたつ並んでいる。「なるほど、いい骨格だ。空手か？」

勝利は頷いた。「警察官になってからつづけています。高校時代まではサッカーをやっていました」

「サッカーは関係ないが、空手は役に立つ可能性がある。よし、整列に加わってくれ」

勝利は第七番目の機動隊員として戸惑いながらゲート前に立った。空手が役に立つ？ 鈴木という言葉がひっかかった。護身術か。村人たちと格

闘でもしようというのか。そんなバカな。鈴木からは拳銃をもっていくなど言われたばかりなのに。七人目の機動隊として整列に加わり、村人とにらめっこすることが任務なのだろうか。現場一帯で緊張感が高まる中、我那覇の言葉を思い出していた——「村人が今日一日、事故なく過ごせるようにするのが金城君、君の使命だ」

一列に並んだ村人のひとりがメガホンを手に叫び始めた。耳をつんざく音に勝利は顔を歪める。

「軍用機が離発着する滑走路をもう一本増やすことは、生活を脅かす騒音が二倍になるということだ！」

そうだそうだと、残りの人々がつづく。

「家族で会話ができない時間が二倍になるということだ！ 学校の授業が止まってしまいう時間が二倍になるということだ！ 赤ん坊が眠れない夜

が二倍になるということだ！」

そうだ。つづく声が興奮の度合いを増していく。

「我々はそんな新滑走路を認めない！ ただちに工事を中止にしなさい！」

昇り旗をもつ女性からも「そうだ」と声上がる。村の中学校で音楽を担当している教師だ。騒音が生徒たちの学力向上の妨げになっていると指摘、この抵抗運動に参加している。黒髪をてっぺんで結わき、紅型をあしらった緩い袖の服を纏っている。

勝利は隊列の一番端に立っていたが、それでもメガホンから飛び出す声は耳に痛く響く。フェンスの内側に建つ四階建ての監視塔を兼ねた司令部に向かって声を張り上げているのだが、その声は機動隊員たちにとつてかなりの攻撃性をもっていた。それでも隊列は何もすることなく、た

だ村人たちと向き合う。村人の主張に耳を傾けるわけでも、反論を展開するわけでもなく、ただそこに立ち、腕を後ろに組んだままバス通り側に目線を飛ばす。

ゲート前に立つふたりのアメリカ人兵士がサングラスをしたまま腕時計をチエックすると、動き出した。黒い鉄で出来た重厚なゲートを左右に開けはじめたのだ。錆びた鉄が擦れる鈍い音が響く。何十年もこの村で過ごしてきたというのに、勝利にとってはじめて聞く音だった。

「来たぞー！」

緩やかな丘を登るためにギアをシフトチェンジするエンジン音が聞こえてきた。紺色のトラックが三台、こちらへやってくる。迷彩色にデザインされた軍のトラックではない。朝の光が反射して運転席の様子を伺うことが出来ない。工事を依頼された民間企業の車輛だろう。ゴツゴツ

したタイヤがアスファルトを踏みしめながら近づいてくる。時速三十キロ程度のスピードを維持しているのは、荷台に積んだ埋め立てのために使う大量の砂利をこぼさず運ぶためだろう。

ふたりの兵士が腕を大きく振って誘導するのと同時に、村人たちがトラックに駆け寄っていく。男が三人、運転席の正面に立ち両手を挙げて走行を妨げる。「止まれ！ 止まれ！」

つま先がブレーキを強く踏みつけたことが車輻の急停車で分かった。後方につづく二台のトラックも同様にストップした。そのままの速度でゲートに入ろうものなら、村人たちを轢き殺しながら進入することになる。

六名の機動隊員が走って、村人たちの前に出る。そしてトラックを背にして、村人たちに優しく語りかけた。

「危ないですからね。ここに立ち止まらないでくださいね」

勝利も同じ行動をとる。村人たちとトラックの間に立ち、トラックをゲートに入れようとする。

「さあ、みなさん、ほんとに危ないですから」

顔なじみのスーパーの島袋が一步前に出て、勝利を睨む。「何ですか？あなたは誰の味方なんですか？新滑走路をつくる側ですか、それとも村人たちの味方ですか？どうなんです」

「いや私は別に……」

仕事だからしょうがなく、とは言えなかった。たまたまヘルプ要員としてやってきただけだと、やる気のない言い回しもしたくない。

「私はみなさんが今日一日、事故のないようにと思ってこうして勤務しているんですよ」

勝利は正直にそう答えた。しかしその声は弱く、微かに震えていた。

「それなら」と、スーパーの島袋が声を荒げた。「このトラックを追い返せばいいでしょう！　なんで俺たちを排除しようとする？　あんたの立場はどっちなんだ！」

■一九八六年——。ココア（心愛）誕生。

玄関で向き合うと、勝利は果南を抱き寄せ、何度も唇も合わせた。

「気をつけてね」

「うん。◇☆◎△……」

唇は動いているのに、声がかき消される。軍用機の爆音のことをふたりは「にんだらおん」と名付けていた。今、上空を通過したのも人工的

につくりだされた凶暴な音「にんだらおん」だった。かなり大型の軍用機がターボエンジンで燃焼させた空気を後方へと排気させている音だ。勝利の言葉がかき消される。スチール製の小窓がカタカタと振動している。その間、ふたりは面倒くさそうに眼球だけを天井に向けて時が経つのを待つ。ふたりには、その音から上空を通過中の機体がF4ファントムであることを察している。カッターのように大気を切り刻みながら、やがて西の方角へと音は移動していった。それから数秒間、ふたりの鼓膜にしばらく残像音が居座っていた。

それから四ヶ月後、勝利と果南はココアを抱いて病院を訪れていた。

「動く分子は音波になって、外耳を通して鼓膜に届きます」とドクターは凶を指し示しながら説明した。診察室に入るまで四十分間待たされた。その間、勝利は果南の手を握りしめていた。今日、こうして手を握りし

める事態になることを、勝利は予想もしていなかった。少しだけ汗ばんでいた手が果南の不安を物語っていた。この病院を選んだのは勝利だった。村の小さなクリニックだが、近所では評判がいい。

「鼓膜の奥には中耳があります。ここですね。ご覧のように三つの骨があって、鼓膜の動きをとらえて増長し、中耳腔のさらに奥へと運んでいきます。これらの骨の振動が行き着くところがこのカタツムリみたいなもの。蝸牛という中耳の部屋です」

子供のころ、図鑑が何かで見かけたような部位だと勝利は思った。幼心にこんな気味の悪いものが耳の奥に存在していることが信じられなかった。ドクターは椅子を回転させながら体の向きを変え、足を組みなおした。そして再びパネルを指差す。勝利と果南は、身を乗り出したままイラストで描かれた図を覗き込む。ココアは果南の腕の中で熟睡して

いた。

「中耳の中には三万個もの有毛細胞があり、振動が感受されると、この聴毛が揺れて聴覚神経を形成する神経繊維に信号を伝えます」

勝利は、風がそよいで稲穂全体が揺れる様をイメージした。若葉が擦れ合つて、やふあやふあと爽やかな音を立てているのどかな風景。耳の中には、気持ち悪いカタツムリもいるが、風になびく稲穂もある。一瞬果南を見ると、窓から差し込む光を反射させて大きな瞳が深い紺色に輝いていた。

「その信号を聴覚神経が脳まで運んではじめて音という概念が生まれるんです。脳が音を感じて、今聞こえている音が何なのかを判断するわけですね。例えば今、おふたりの脳が感じているのは、私の声という音です」

果南はパネルから目をそらして、背筋を伸ばした。勝利も一息ついた。

難しいメカニズムを大雑把ではあるが理解できたような気がした。

「つまり、長い旅路を経て、音は脳に届くんですね」と勝利は言った。

「それも一瞬のうちに」と果南は言った。

ドクターは椅子を半回転させると、ふたりと向き合った。横から見ていたときと違って、ドクターの顎は角張っていておとぎ話に出てくる魔法使いみたいだった。糊の利いた白衣がねじれたことで発生した微かな音を、勝利の外耳がキャッチし、鼓膜を動かし、中耳、内耳を経て、脳が感じた。

ドクターは、万年筆の軸を指でなぞりながら、何を言うべきか、言葉を整理しているみたいだった。膝の上に両手を置くと、ドクターは言った。「残念ながら、百デシベルの音にも脳波が無反応を示しています。お子様の耳はほとんど聞こえていないことになります。先天性難聴です。それも、

内耳奇形といって、母胎にいるときに何らかの原因によって内耳の成長が止まり、音を聞くための機能が發育しなかったことが考えられます」

「どうすれば治りますか？」と果南は尋ねた。頬は赤く染まり、瞼に大きな涙が一粒浮かび、今にも溢れ出そうとしていた。

ドクターは首を振った。

「内耳、つまり先ほどの説明でいうと、このあたりですね。ここが未発達のため、外科的な手術も不可能です。国際学会では今、電極を内耳に埋め込み、聴神経を直接電気刺激することによって音声情報を中枢に伝える人工内耳手術という手法を研究している機関もありますが、まだまだ実験段階。むしろ、手術後、どのような後遺症があるか分からない分、とても危険でリスクが高い。今の医学では、残念ながら治療は難しいです。あえていえば」とドクターは絞りだすように無駄に明るい口調で言った。

「この子に笑顔で話しかけたり、あやしたりするスキップは、感性を養う上でとても役立ちます。絵本を見せてあげたり、散歩に連れだし花の匂いを嗅がせたり、動物と接したり。そうやって五感を使わせて、さまざまな刺激を与える生活を心がけることが、もつともいい治療になります」

「原因は？」 勝利は尋ねた。「例えば、騒音とかはどうです。軍のヘリコプターやF4ファントムによる騒音の下で、内耳が発達障害を起こしたとは考えられませんか」

ドクターの表情に一瞬、陰りが生じた。「原因を特定することはできません。何らかの外的要因によって、としか言いようがないのです。もしもそれを証明したいのなら、司法の場へと議論をゆだねる必要がありますでしょう。医学とは、ときにやつかいで、無力なものです」

■二〇〇〇年——。ゲート前。

「抵抗運動1530日目」——。テント前に掲げられた小さな看板の数字を今日も勝利は装甲車のドアのすき間から確認する。

ヘルプ要員としてはじめてこの現場に来てから、少なくとも1500日以上もの歳月が経過したことになる。今日も翼を休めているヘリコプターはすでに二代目の新しい機種だ。初代のHH60型は老朽化が進み、住宅街の上空を飛行するのはきわめて危険との判断から新しい機種が導入された。ただし、F4ファントムはそのまま運用が続いている。

勝利は交番勤務を経て、機動隊チームに正式に配属されていた。

「ジュゴンの海を埋め立てるな」——。テントの庇から垂れ下がった黄色い布に朱書きされた布が雨風に叩かれている。朝七時。市民がすでに数

百人規模で集まり、朝の集会を行っているところだった。

スーパールの仕事を辞め、この抵抗活動に専念していたリーダーの島袋初男が第一声を放っている。今年に入ってから、地元の新聞もこの抵抗運動に注目し、日々記事を書くようになり、市街地からはテレビ局のクルーもやってくるようになっていた。雨よけのビニールで包んだ、釣り竿みたいなマイクをもつ男と、ビデオカメラを肩に乗せた男が一齐にテントの方向へ注目する。

「みなさんおはようございます。今日でえーっと。1530日ですか。今日も資材が運ばれてくるという情報をつかんでいます。滑走路の向こう側にある岩礁を埋め立て、そこに新滑走路をつくるために用いられる何かしらの建築資材だと思われます。今日は、その搬入を止めるためにこんな大勢の村人が揃いまして、ご苦労さまです」と、島袋は肉声を放つ。

アスファルトを叩く雨音を突き抜け、声が響く。

「いいですか、みなさん。今日はまず三線の先生たちにゲート前でライブを開催していただきます。どうぞ前へ」

麦わら帽やハンティング帽を被った男が五名、三線を抱え、テント前に出てきた。テントの裏側は赤花が咲きほこる土手になっている。テントは多くの人々を雨から守るにはあまりにも小さかった。

「この先生方に三線を習った人も、みなさんの中にいらっしやると思います。まず左端の方は、野村流師範の仲間先生、その隣は教師の資格をお持ちの比嘉先生、それから……」と、唄者の紹介がつづく。「今日はあいにくの天気ではありませんが、素晴らしい三線の音色をこのゲート前で聞かせていただけるということで、本当にありがとうございます」

髭の濃い男がひとり、微笑みながらカラクイを掴み調弦をはじめた。

弦が弾かれ、乾いた音をひとつ立てた。麦わら帽の初老の男は、カラクイを握ったままゲート前を見ている。

冷房のきいた装甲車の中で「いいか」と鈴木は隊員たちに告げた。「抵抗運動の人数がこれだけ増えてきたこともあって、機動隊員がさらに増員されることになった。しかし、油断するな。抵抗に参加する村人の数も、毎日増えつづけている。よその村からやってくる人もいるほど運動は拡大しているからな」

勝利たちは頷いた。七対三十でスタートした新滑走路建設の抵抗運動もいよいよ百人を越える大規模のものとなってきたのだ。国が進めている新滑走路建設ではあるが、工事の進捗は見事に遅れていた。ここで機動隊の人数を増やして一気に劣勢を挽回し、工事を加速させる戦法だ。

勝利は胸の奥からいつもの震えがこみ上げてくるのを感じた。ふたつ

の肺の真ん中あたりで、小さな蛾が羽根をばたつかせるような感覚が突き上げてくるのだ。毒の粉を巻き散らかせながら喉へと上昇してくる。そのまま口から飛び去ってくればラクなのだが、そうはいかない。蛾は、喉をくすぐったかと思うと、再び胸の奥深くへ舞い降りていく。羽根がどんなカタチをしているのか、何色なのか。想像もつかない。ところどころに穴が空き、破れているかもしれない。七色の色彩が不気味に輝いているかもしれない。いつも微かな風を巻き上げ、いつの間にか舞い降りていく蛾のゆらめきと、毒の粉が溜まっていくような感触。五年前、七対三十の対立に参加した日から、この発作は襲ってきた。

村人たちが行っていることは、非暴力による抵抗だった。ゲートの中に石を投げつけることや、機動隊の胸ぐらをつかむような行為は一切しない。彼らの目的は新滑走路の建設を断念させることだ。そのために、

みんなで知恵をしぼり、暴力以外のあらゆることを行ってきた。亀が手足をひっこめ、甲羅だけで闘うように。だから機動隊も慎重にならざるを得ない。非暴力で抵抗している村人にケガをさせるような行為は村全体を、強いては県民や県の行政から大きな批判を浴びることになる。それだけではない。村人を暴力的に押さえ込もうとする様子をメディアによつて報道されたら国民的な反感を買うことにもなるからだ。

唄者たちが五人、ゲートに背を向けて一列に並んでアスファルトの上にあぐらをかいた。バス通りを挟んで、テントから溢れ出る人々から拍手が鳴る。指笛も飛び交う。若者たちが唄者たちの背後に走り寄り、傘を開いて三線が濡れるのを防ぐ。

地べたを叩く雨が跳ね上がり、唄者たちのズボンに染みこむが彼らは調弦に集中する。二本、設置されたマイクが雨音をひろう。ドアを半開

きにした装甲車の中へも、スピーカーの音が流れてくる。勝利は、調弦が進み、少しずつ音が引き締まっていく三線の音色に耳を澄ませていた。自分も毎日、ココアに聞かせてきた三線。重度の難聴でありながら、ココアは幼い頃から三線を弾く勝利の姿を楽しそうに見ていた。聞こえてくるかのように。

五本の三線からバラバラに鳴っていた音が一度止み、再びマイクがひろうるのは雨音だけになった。不規則にたたみかける強い雨音に混ざって、濁いた音がひとつ鳴る。五人が抱える三線から弾かれたものがひとつにまとまった音だ。間が空く。贅沢な間だ。その間も雨音をマイクがひろう。またひとつ、鳴る。またひとつ。勝利はその唄が「かじゃでい風」であることに気づく。何度か、三線の音がマイクから放たれるだけで、もう雨音は気にならなくなっていた。

きゆぬ ふくらしやや なをうに

ぢやなたている♪

(今日の誇らしさを何にたとえられようか)

五人の声が重なり合い、重厚なうねりをつくりだしていく。高齢の女性がひとり、扇を正面にかざしながら雨の中をゆっくりと歩きだした。村の中学校で音楽を担当しているあの教師だった。紅型をあしらった緩い袖の服のうえから薄手のジャンパーを羽織っているが、雨を遮るにはあまりにも弱々しい。しかしそれでも力強くアスファルトの表面を足の裏で確かめるように一歩ずつ、バス通りを越え、五人の唄者たちの前へとすり寄っていく。

ついでいをうるはなぬ

ついでちやたぐとう♪

(つばみが露を受けてひらいていくようだ)

テント内の人々は静まりかえっている。歌三線に耳を澄まし、女性が扇を舞い上げる踊りに見入っている。すり足で進みながら五本の三線の前まで行き着くと、舞いながらひるがえり、テントの人々に向き合う。そして、膝を大きく落とし、扇を返す。雲からときどき差し込む淡い光が雨を斜めに輝かせる。舞踊を演出するように。

つばみが朝露を受けて花開く――。まさに今を物語るような唄だ。村人たちは、新滑走路の建設を断念させるという強い願いを共有している。その願いは彼らにとって清く誇らしいものなのだ。弦が弾かれる音と音

の間を支配する豊かな静寂。その音空間の中で舞う女性と扇。本来なら背景にあるのは、陽光に照らされたエメラルドグリーンの海なのかもしれない。あるいはスポットライトで照らされたシンプルな舞台背景。村人たちで埋め尽くされた公民館の中でもよく演奏される。しかし今、背景に見えるのは緑色のフェンスと、グレイのヘリコプター、水平線に沿って横たわる雨に染まった旧滑走路だ。

先頭を走ってきたクルマが後続車を引き連れたまま一度ゲート前を通り過ぎ、すぐ先でUターンし走行車線をフェンス側に移動してやってくる。そして強めのブレーキで止めると、さらに強くサイドブレーキを引く音を立てて、「国際建設」と書かれたドアが開いた。

「おいおい。何なんだこれは？」

ワイシャツとネクタイの上から作業着を羽織った男が降りてきた。「雨

「だどいうのに演芸会か」

そう言いながら、チツと舌を鳴らした。黒縁の眼鏡レンズに水滴がつくのを嫌うように、掌で庇をつくっている。後続の小型バスから、機動隊員が次々に降りてくる。

「整列！」のかけ声と同時に、機動隊員たちが整列した。

鈴木が叫ぶ。

「排除だ！ 排除！ 逆らうものはしよっぴけ！」

五人の唄三線は何事も無いようにつぶいている。糸乱れることなく唄が歌われ、扇をもった女性も静かに舞う。人だかりの中から、リーダー格の島袋がバス通りを左右確認し、早足に横断してくる。そして勝利と一瞬目を合わせてから、鈴木の前に立った。

「唄三線の邪魔をしないでください。村人たちはこの日を楽しみにしてき

たんです。あちらに掲げているように、私たちの主張は、とてもシンプルで明確です。この昇り旗を見てください」

「ジュゴンの海を埋め立てるな」

「新滑走建設反対！」

「静かな村を返せ！」

雨風にさらされて色あせ、ところどころ破れているが、文字はしっかりと読める。

「静かな」の三文字が勝利の心に突き刺さった。日常生活のすべてに土足で踏み入り、暮らしのシーンを中断させるあの忌まわしい「にんだらおん」。テレビの音が聞こえないとか、学校の授業がストップしてしまうばかりではない。「にんだらおん」からくるストレスによってこの村ではめまいや吐き気、難産や流産の確立が高いこともここ十数年の統計から分

かつてきた。ココアも、軍用機の滑走路がなければ重度の難聴として生まれ、まわってくることはなかった筈だ。静かな村を取り戻せるなら、自分だつてこの運動に参加したいと勝利は思った。新滑走路などこの村にはいらない。これ以上の爆音を巻き散らかさないでほしい。新滑走路はもちろんのこと、できれば今ある滑走路もヘリコプターの離発着場も撤退してもらいたい。そして沿岸を埋め立てることなく、かつて存在していたフクギに囲まれた村落に再生するべきだ。地主に土地を返すべきだ。今、つくるのは新滑走路ではない。星砂岬の断崖で波が碎ける音がときどき風に運ばれ、蟬の合唱が平和な昼下がりを演出し、近所の赤瓦の民家から赤ん坊の泣き声とそれをなだめる母親の子守歌が聞こえてくる、ゆるやかな時が刻まれる村落をつくるべきだ。生まれながらにして健康被害を被ったココアのような存在をこれ以上増やさないためにも。何代も先

に生まれてくる我々の子孫のためにも。

女性の踊りが止まった。雨が顔面を叩くので分かりにくいだが、彼女は泣いている。五本の三線のうち、何本かが演奏を中断している。

「つづける！」と、テントの村人たちから声がする。「俺たちはちゃんと聞いているぞ！」

耳をつんざくような笛が鳴ると同時に、機動隊がアメーバのようにひとつにまとまる。勝利は後方についた。

村人の中から年配の男性がふたり、車輛の正面に飛び出た。腕を大きく振り、止まれと指示する。タイヤの動きがゆつくりと止まる。そのままアクセルを踏み続けていたら、当然ふたりは轢き殺されることになるからだ。吐きすてるようなエンジン音がして、車輛は完全に止まった。三十代くらいの村人がひとり、正面のサーチライト下にあるアルミの枠

を両手で握りながら、するりと車輛と地面の間に潜り込んだ。他の男たちも、次々に車輛の下に入っていく。踊っていた女性が扇を胸元に仕舞い、大きなタイヤに身を寄せて横になった。もうひとつのタイヤには初老の女性が自らの身体を寄せた。

徐々に開かれていくゲート前にはその他の村人たちが腕を組んだスタイルで寝転んだ。ゲートに入るのなら俺たちを轢き殺してから行けとでも言わんばかりに。

鈴木が指示を出す。「まず歌っているグループを排除する。彼らは明らかに立ち入り禁止区域に踏み込んでいる」

「どこがだ？ 立ち入り禁止区域があるのなら線でも引っ張っておけ」島袋が反論する。

「工事の邪魔になる場所はすべて立ち入り禁止区域だ。排除だ、排除！」

「根拠は何だ？ 邪魔の根拠を示してくれ。我々は音楽会を楽しんでいるだけだ」

島袋の質問には答えず、鈴木は短く二度笛を鳴らす。警備隊員が小走りで唄三線の後ろにいる若者からコウモリ傘を奪い取る。取っ手をしっかり掴んでいる者からも強制的に取り上げていく。雨よけがなくなってしまうた唄者たちは雨にさらされながらも、三線を爪弾き、唄を歌う。ひとりの唄者に、ふたりの警備隊員が背後から近づき、羽交い締めにして腰に添えられていた三線を奪い取っていく。そして両腕と両脚をふたりに掴むと、大の字になった唄者たちを次々にフェンス内へと拘束していく。仰向きで抱えられる唄者もいれば、地面に顔を向けた不安定な体勢のまま運ばれていく者もいる。唄者たちは、抵抗はしない。もがくことなく、声を張り上げることもないため、ほんの二、三分でステージだった

た場所は無人と化し、雨に叩かれる三線だけが残った。

勝利にいつもの発作が起こる。蛾が胸をかきむしる、あの発作が。

鈴木が遠くから声を張り上げた。「テント、強制撤収だ。いくぞ勝利！」
勝利たちは小走りでバス通りを横断し、テント前に整列。村人たちと向き合う。

「なぜ？」ひとりの女性が投げかける。「このテントが何をしたっていうの？」

「そうだ。あなたたちにだって、滑走路の騒音が聞こえているだろ？ あんただって」と、勝利を指刺す。「あんた、金城さんだって、娘さんがほら、生まれつき耳の具合が悪いじゃないか。それが軍用機の騒音とは無関係だと思っているのか？」

勝利は質問を打ち消すように目をそらす。無関係の筈がない、と心で

は思っている。愛するココアの内耳機能を奪ったのは、間違いなく「にんだらおん」だ。ドクターははっきりと明言しなかったが、医学的な根拠を認めてしまうと国はさまざまな保障や対応に迫られる。新滑走路の工事にも影響が出るだろう。だから、医療機関に対して少なからず圧力をかけている可能性がある。勝利はそう睨んでいる。

号令もなく、テントの撤去が始まった。鉄パイプの骨組みが外され、雨に濡れた布が地面との距離を縮めると、それまで雨を凌いでいた村人が外へと追い出されていく。「ジュゴンの海を埋め立てるな」の昇り旗が倒される。金属音が響く度にテントが小さくなっていく。骨組みを分解すると、ほんの数分でテントはカタチを失い、土の上を覆い被さる布となった。そのすぐ横では赤花が露を受けて色濃く咲いていた。

「テント撤去完了！車輻をゲートに通すぞ」

テントを追い出された村人たちがバス通りを横断し、ゲート前へ移動をはじめた。通勤途中のクルマが急停車し、ぞろぞろと道を横切る多くの人数に驚いている。

工事車輛の下に潜り込み、タイヤに身体を寄せることでフェンス内への進入を阻止している村人たちの撤去がはじまろうとしていた。テントから押し寄せた村人たちは、車輛を取り囲み「がんばれ」と、声をかける。「君たちの勇氣に、機動隊は何もできないでいるぞ」

舞踊を踊っていた女性が唄を歌い出す。それは、誰もが知っている地元の民謡だった。三線なしの歌声が雨音をかき消す勢いで響く。車輛に背を向けて、円陣を組んだ村人たちと、勝利たち機動隊は対峙した。しかしその睨み合いも、わずか数秒で終止符を打つ。鈴木の一言で――。「ごぼう抜きはじめ！ 潜り込んでいる者から排除！ 邪魔する者はしよっ

ぴけ！」

車輛を取り囲む村人たちの輪が崩れない。ひとりを引き離そうとするともがいて抵抗する。やめろ、あぶない、何するのよ、……。民謡に混ぜて、怒号が飛び交う。公務執行妨害。逮捕するぞ。このやろう。きさま。殺す気か。バカヤロー。汚れた単語が荒い息とともに轟き、現場は極めて危険で混乱した状況になった。

勝利も、団結している村人たちを一人ひとり「ごぼう抜き」していく。村人と村人がつないでいる手を引き離し、羽交い締めにし、腕や脚をつかんで運んでいく。女性が歌う民謡が涙声になっていくのを感じながら。自分は本当は、テントの中に立つべき人間なのだと勝利は思う。村人たちと肩を並べて、機動隊と向き合う側の人間なのではないかと。愛する家族のためにも。しかし現実には、紺色の制服に身を包み、拳銃を所持

していなくてもこん棒をぶら下げ、ここ十年にわたって非暴力による抵抗をつづけている村人たちを制圧する側にいる。何度も仕事を辞めようと思ったができなかった。ココアの難聴を治療する医療費をかせぐためだ。一九八五年に日本で初めての人工内耳埋め込み手術が成功したと、ドクターは教えてくれた。耳の奥に特殊な装置を埋め込み、音を電気の信号として感知させるというものらしい。詳しくは理解できていないが、アメリカが開発した最新の治療をココアにも受けさせたい。しかし、その手術には四百万円もかかる。家が一軒建てられるお金だ。それだけのまとまった金額を得るためには、警察官として仕事をつづけていかなければならない。途中で退職して、新しい職を探すのはとても困難だし、今の年収を上回することはまず不可能だろう。もともと警察官になった理由は、村の安全・安心を守るためだった。我那覇所長は一九七二年の「史

上最大の現金輸送作戦」を経験し、勝利はまだ新人だった一九七八年に「ナサンマル」を経験した。しかし、そうした歴史に刻まれるような出来事よりも、日常生活の中で困っている人を助けるような仕事を勝利は好んだ。道案内は日常業務だった。何丁目の誰々さん宅へ行きたいのだから行き方が分からない。そんな人に対して大きな地図のポスターで説明した。夜中に倒れている酔っ払いを交番に泊めて、翌日さんぴん茶を飲ませて帰したこともあった。

俺はいったい何のために警察官になったのだ？ 誰のために。何を守るために。

「こらー！ 何突っ立っている？」鈴木隊長が息を切らしながら怒鳴っていた。「ちゃんと仕事をしろ！」

勝利の目の前には、トラックの下から「ごぼう抜き」されようとして

いる男の姿があった。身体はすでに引きずりだされ、ふたりの機動隊が両脚をつかんでいる。しかし男は、両手でしっかりとフロントのバンパーを掴んで放そうとしない。そのため身体は宙を浮いたままだ。機動隊のふたりがズボンの裾を掴んでいるため、お尻の半分が見えてしまっている。バンパーを掴んでいる手を引き離してしまえば、男は確保される。

「勝利！　今、お前がやるべきことは何だ！？」　鈴木 of 怒号が聞こえた。

「はい。ごぼう抜きであります！」と、勝利は答えたが、滑走路へ突入してきた軍用機の轟音によって、あたり一帯の音はすべてかき消された――。

※
※
※

「ここで両親についてお話してもいいですか。ありがとうございます。」

私のような重度難聴が産まれてきて、両親はさぞかしショックだったと思います。私は何才のころだったのか、おそらく2才とか3才とか、その頃だったと思うのですが、母親が泣いていたんですね。泣き声はもちろん聞こえませんでしたが。でも目の色がたぶん真っ赤だったと思うんです。で、顔がぐちゃぐちゃになっている。幼心にも、ママが泣いている、悲しんでいることがちゃんと分かりました。それが私のいちばん古い記憶です。

こういう言い方をすると、母親のことをすごく弱い人間に思ってしまうでしょう？ そんなことないんですよ。一般の学校へ進学させたのも、私を普通の子と変わりなく育てようとした母の強さが表れていると思います。

耳が聞こえないと、周囲の友だちが何を話しているか、当然分かりません。イヤホン型の補聴器をつけていましたが、楽しい話題なのか、悲しいことなのか、昨日観たテレビのことなのか、今日の授業のことなのかさえ、私には理解できないことが多かった。そういうとき、私が何かを言うと、みんなが「こいつ、何で今ごろそんなことを言っているんだ？」と、不思議そうな表情になるんです。今でいう「空気が読めない子」だと思われていました。

泣きながら家に帰って、母にそのことを伝えるとこう言われました。『筆談をうまくつかって、相手の会話に入っていく努力をしてみなさい』。母は普通の言い方でそう言うのです。普通の言い方という意味は、母は私に話しかけるときの、ゆっくりと大きな声で口をおおげさに動かしながらしゃべることをしませんでした。父親に話しかけるときの同じようなス

ピードで、小さな声で、いわゆる普通に語りかけてくるのです。だから、私は母親が何をしゃべっているのか、全身の感覚を集中させて理解するようにしました。

母とふたりでタクシーに乗ると、いつも不思議なことが起きていました。いつも違うタクシーだし、別の運転手さんなのに、なぜか私の家の場所を知っていて、そこへちゃんと連れて行ってくれる。でも、母の言動に神経を集中させるようになって、分かったんです。タクシーに乗ると、母は運転手さんに家までの道順を言葉を使って、しゃべっていたんだと。説明していたんですね。私は窓の景色ばかり見ている、そんなことにも気がつかなかった。私はそうやって、母からたくさんトレーニングを受けました。

母からこんなことを言われたこともあります。『あなたの人生と、おか

あさんの人生を交換することはできないの。だから、あなたの人生はあなた自身の力で生きていくしかないの。もちろん、精一杯の応援をするけどね』。

そう言われたときは、見捨てられているような気がしてすごく悔しくて、大泣きしました。でも、今では感謝しています。そこまで言ってくれたから、きつと今の私がいるからです。

毎朝、母は私にこう言いました。『今日のココアの夢はなに？』この質問を毎日投げかけられました。その度に私は戸惑いながらも、正直に答えてきました。残さず給食を食べること。一度でもいいから手を挙げて先生に答えを言うこと。昨日ひどいことを言われた友だちに笑顔で筆談をお願いすること。母の料理のお手伝いができるようになること。目玉焼きをつくれるようになること。唄をひとつ歌えるようになること。い

ろいろなその日の夢を説明してきました。

一方、父親は毎日、三線を弾いて私に聞かせてくれました。いや、父の唄声も三線の音色も、私には聞こえません。それを父も承知でした。でも、毎日私の前で正座して、唄三線を一曲演奏してくれるんです。どんなに疲れて帰ってきてても、ケースから三線を取りだし、カラクイを掴んで音を整え、演奏をはじめます。その間、私は唄三線に聞き入るというより、父の演奏する姿を見ていました。そしてイメージを膨らませて、唄を感じていました。三線の音色も、自分なりにイメージしていたんです。私には三線の音色がオレンジ色に見えていました。夕暮れどき、海を煌めかせるあの大きな太陽の色です。聞こえない三線に太陽のオレンジ色を重ね合わせて、父の唄を見つづけてきたわけです。

そんな父が一日だけ、三線を弾かない日がありました。多くを語りま

せんでしたが、仕事に疲れたと、自分の心が分からないと、そんなことを筆談用のメモに書いたのを覚えていきます。表情は暗く、制服は泥だらけでした。『それは私のせい？』と聞きました。『私のせいで、仕事を苦しんでいるの？』と。それは違うと、父はきっぱりと言い切りました。ただとても疲れているだけだと。だから今日は三線を弾けないと。それでいいと、私は言いました。疲れているのなら、どうぞ休んでくださいと。手術をすることはとても不安でした。耳のうえあたりに穴を開けて、人工中耳の小さな機械を入れるのですから。いくら全身麻酔だからといっても、やはり恐怖心のほうが強かった。でも、人工中耳の手術も、ようやく健康保険の適用が認められる時代になったのです。父は警察官として、母はスーパーのレジ打ちとして、私の医療費のために必死に仕事をしてくれました。私は自分の力で自分の人生を歩んでいかなければなり

ません。父は手術を受けるか受けないか、迷っている私にこう伝えました——『ココア、いいかい。答えは君の中にある』

『どうすればその答えにたどり着けるの？』

『すべてを脱ぎ捨てるんだ。プライドも、立場も、すべてを』

『心ごと裸になれと？』

『裸になるだけじゃ答えは見えてこないさ。命だけになって考えてみない。そうすれば答えが見えてくる』

——あの日のことは忘れられません。

私はガラス張りの個室に座らされて、ドクターが耳の外部に装着された小さな器具を調整していました。『これはサウンドプロセッサというもので、音をマイクでひろって電気信号に変えて、手術で埋め込んだインプラントへ送る装置なんだよ』と、メモ書きで説明してくれました。ド

クターが部屋を出て、調整室に入りました。そこにはもちろん両親の姿がありました。ガラス越しに、ふたりは私に向かって大きく頷いていました。私も同じことをしました。そして――。

それが音だと感じるまでに、数秒かかりました。でも、それは明らかに今までの人生に欠けていたものでした。だから、音だと判断できました。その音は、初めて聞いた音なのに、なんだか毎日聞いているような気がしたんですね。なぜなら、その音が太陽と同じオレンジ色だったから。はい、そうです。それは父が弾く唄三線の録音テープだったんです。

とめどなく涙が溢れました。こんな素晴らしい瞬間が訪れるなんて。世の中がこんなにも美しい音で溢れているなんて。ガラス越しに、両親も泣いていました。翌日、私は両親にこう言いました――。『お父さん、お母さん、ありがとう。私の夢は三線に乗せて、歌を届ける人。唄者に

なることです』

みなさん今日はほんとうにありがとうございます。それでは、今日最後の歌です」

■二〇一六年——。ゲート前。

アパートの窓に差し込む朝の光で勝利は目を覚ました。昨夜、那覇のホテルで行われた「定年退職記念パーティ」では、泡盛の三十度をできるだけ薄く水で割って飲んでいたつもりだったのに、気がつけば記憶が吹っ飛んでしまった。アタマを振りながら、ベッドから半分身体を起こす。果南はベランダで洗濯ものを干している。

「さんぴん茶をどうぞ」大きめのマグカップをココアが運んできてくれた。シャワーを浴びたあとの長い黒髪が湿っている。果南もココアも今朝は

かりは、寝坊する勝利を放っておいてくれたのだ。

「すまんー」勝利は一気に飲み干す。身体の隅々にさんびん茶が染みこんでいく。「何時だ？」

「もうすぐ十時になるところ。そのさんびん茶で、ちようど十時茶だねー」ベッドを降り、シャワーを浴び、無駄な髭を剃った。玄関脇に立つ身長と同じ高さのコートハンガーに昨夜脱いだ制服セットが飾られている。シャツ用のハンガーにネクタイとワイシャツが吊され、紺色の制服を羽織らせている。アイロンのかかったズボンが床に向かってまっすぐに吊されている。自分の顔面でも乗せたら、コートハンガーごと歩きだしそうだ。

「あら、起きたの。おつかれさま。ごはんつくりましたよねえ」果南がベランダから顔を出す。

「いやいい。出かけついでにジューシーでも買うから」

勝利は赤い柄の入ったかりゆしウェアを着た。とても軽い。制服をもう着ることがないと思うと、なおさら着心地の軽さを感じた。少しだけ寂しい気もするが、存分に仕事をしたという達成感も同時にある。それに第一、自分はもう若くはない。果南とココアが玄関に集まってくれた。

「気をつけてね」とココアが言う。

「そのかりゆしウェア、似合っているさ」

そうか、と微笑んで勝利は帽子のツバに手をかけようとした。「あつ、制帽もしてないんだ。じゃあ、麦わら帽子を被って、と」

勝利の後ろ姿を、ふたりはいつまでも見つめていた。ときどき、顔を合わせて微笑みながら。

バス通りをまっすぐ歩いていくその先に、いつもの光景が広がってい

た。たくさんの昇り旗が潮風に揺れ、人々の叫び声が聞こえてくる。黒いヘリコプターがバリバリと不気味な音を立てて竜巻のように昇っていった。砂埃が舞い上がる。ゲート前、村人たちは一斉に腕を組んで整列していた。目の前に立ちはだかる機動隊の制服たち。そのひとりの肩に黄色い蝶がとまっている。新聞記者とテレビ取材班たちがいつでも映像を配信できるように待機中だ。勝利は人々をかき分けながら歩く。ときどき肩がぶつかるがそれでも歩く。そして機動隊とにらみ合う村人たちの前まで行き、祈るように言った——「今日から、みなさんと同じ側、抵抗する側に立ちたいんだが、いいだろうか？」

(了)